

第 1 章

Regional Security Complex 概念に関する基礎的考察

坪内 淳

要約：

国際安全保障の地域レベルの分析における唯一の「理論」とされる、regional security complex 概念（理論）について、『People, States and Fear』、『Regional Orders』、『Security: A New Framework for Analysis』および『Regions and Powers』での議論の整理を中心に、概念の発展と理論化を検証する。最後に今後の論点の提起を行い、相当の理論的、事例的蓄積と、興味深い論点が提示されてきたにもかかわらず、同概念を看過してきた現状の問題点を指摘する。

キーワード：

RSC、RSCT、地域安全保障複合体、安全保障理論、securitisation、コペンハーゲン学派

はじめに 本稿の目的と射程

本稿は、regional security complex 概念について検討する。同概念は、バリー・ブザン(Barry Buzan)によって1980年代前半から提唱されて以来、一定の支持を得てきた¹。

しかし同概念は、現在まで、主に地域研究の諸論文の中で援用されることが多く、ブザンを始め、いわゆる「コペンハーゲン学派」とよばれる数人の研究者以外には、これが国際政治、国際関係論あるいは国際安全保障の理論的検討の対象とされることは少なかった。また日本では、同概念は専門家の間ではしばしば散発的に、しかし好意的に言及されながらも、主流の議論からはほとんど「無視」されてきたといっていよう。この点は興味深い論点ではあるが、今回は検討の対象としない。

なぜこの検討が必要なのか。まずそれは、ブザンが言うように、これが地域を分析するほぼ唯一の概念、ツールであるからである。国際関係、安全保障における「地域」概念の重要性については、本プロジェクトの前提でもあるため、ここでは触れないが、この国際システムにおける地域という分析軸は、近年ますます重要視され、またさまざまな視角からの研究が展開されているにもかかわらず、それはあまりに拡散的で、論点の収束による建設的な研究蓄積に乏しい。

この打開策として、少なくとも安全保障分野だけでも、一定の分析概念を共有し、それに基づいた研究が展開されるべきであろう。この問題意識によって、本稿では、regional security complex 概念が、そのようなツールとしてどのような有用性、意義、あるいは限界を持っているのかについて、これまでの関連主要業績の包括的考察を行う。

なお、以下では、regional security complex についてRSCと略し、(regionの付かない)security complex という原文の表記はそのまま用いている。securityは概念として単体で用いられる場合は原則として安全保障とは訳さずに原語のままとし、regionは地域と表現する。

第1節 『People, States and Fear』におけるRSC概念の提起

RSC概念がブザンによって最初に提示された『People, States and Fear』は、必ずしもRSC概念、理論を中心にした研究ではない。それは、副題に示されるように、ポスト冷戦期における国際安全保障研究のいわば概説書であり、その意味において、国際政治学、国際関係論の分野で重要な業績である。したがって、RSC概念展開の背景として、同書の全体像

¹ Barry Buzan, *People, States and Fear: The National Security Problem in International Relations*, Wheatsheaf, 1983. なお、この第二版が Barry Buzan, *People, States and Fear: An Agenda for International Security Studies in the Post-Cold War Era*, Wheatsheaf, 1991 であり、とくに言及のない場合、本稿ではこの第二版を用いる。

や、ブザンの security 概念について簡単に触れつつ見ていこう。

ブザンは、『People, States and Fear』の冒頭において、人類が直面している諸問題の中で、個人であろうと、国家であろうと、国際であろうと、security が最重要であることには異論がないだろうと大きな前提を提示し、そのなかで、国家がほかの2つのレベルの状況の多くを支配しているがゆえに、national security が中心的課題であるとする。そして、それを適切に理解するためには、security 概念の把握が必須であるにもかかわらず、1980年代まで、power を中心概念とする現実主義と、peace を核とする理想主義の2つの支配的な議論によって、security 概念が適切に扱われてこなかったことを指摘する。(1-2 頁)

そして、security 概念が、国際関係研究のアプローチとして、power や peace よりも有用であることが同書の核心的主張であることが示唆される。(3 頁)

さて、ブザンは、security 概念の論争性や概念化の未発達について俯瞰した後、power が物理的能力の政治的影響について、justice が公正な結果の追求についての議論であるという一般的な感覚にならえば、security は脅威からの自由の追求に関する議論であることは明白であるとする。したがって、国際システムの文脈においては、それは、国家や社会が、その独立したアイデンティティや機能的な統合を維持する能力に関するものであるとされる。(18 頁) そして、その対象は、第一意義的に人間集団であり、個人は二次的な問題に過ぎないという。さらに、そのような人間集団の security に影響を与える主要セクターとして、軍事、政治、経済、社会、環境の5つを提示する。(19 頁)

これが、ブザンが RCT 概念を展開する、前提的議論である。この後、第1章で個人と security、あるいはそれと国家との関係について検討し、2章では、security の対象としての国家の問題に議論が展開される。そして、3章では、脅威、脆弱性などについて、4章では、システムレベルにおける国家と社会の関係、すなわち、security 議論における、国際システムの政治的アナーキー構造が論じられる。

その後、第5章「Regional Security」のなかで、いよいよ RSC 概念が展開される。同章は、security 分析の対象として地域というサブシステムの存在を指摘し、それを分析するための枠組みを提起する。その目的の一つは、地域研究者に、その研究の顕著な弱点である、地域横断的な比較研究を容易にする、概念を提供することである。(もう一つの目的は、国際安全保障問題における地域レベルの重要性を看過しがちな現実主義者の傾向を補完することである。)具体的には、安全保障地域サブシステムがどのように作用し、それぞれが互いに、あるいはそれらが大国とはどのように異なるかを説明する。そして、地域安全保障の現在のパターンをもたらした歴史を検討、このパターンの世界的規模でのラフな描写を行い、地域と大国のダイナミクスがどのような相互関係にあるかに言及していく。その後、地域パターンがいかに変化可能かを検証し、変化のダイナミクスを捉えるためのシ

システムの選択肢を提示する。最後に、これを用いた地域安全保障分析の政策的有用性を検討する、というのが同章の構成である。(186頁)

さて、ここで、ブザンは、シームレスな網目 (seamless web) 問題という重要な指摘を行う。これはどういうことであろうか。「security は相関的事象 (a relational phenomenon) である。」そして security が相関的であるゆえに、ある国の security は、それが埋め込まれている安全保障上の相互依存の国際的パターンの理解なしには把握できないという。このことが、システムレベルの分析を必須とするのであるが、もし各国の security が全ての国の security に関係しているなら、あらゆることを理解しなくてはなにも完全には理解できない、ということになる。このようなことでは、security 研究は非現実的となってしまう。(187頁)

したがって、その唯一の解決策は、国際システム内部に分析レベルの階層性を見つけることであるという。それぞれのレベルは、持続で重要かつ、ほぼ独立したものである必要があり、そしてどのレベルも、それだけでは安全保障問題全体を把握するのに適切でなく、それぞれの完全な意味は他のレベルとの関係のなかで初めて明白となるようなものであるとされる。そして、システムレベル、国家レベル以外に、地域レベルでの安全保障問題の重要性が指摘される。地域レベルが適切に把握されないと、域内国家同士、あるいは大国と域内国家の関係性が適切に理解できないことになるという。

そして、(とくに政治、軍事的) 脅威というものが、近い距離においてもっとも強く感じられるという単純な仕組みからみても、地域という地理的近接性を持ったサブシステムの重要性は当然だという。(しかし歴史的に見ると、世界的な植民地システムによって、欧州以外の地域安全保障サブシステムという考えが発達せず、さらに、脱植民地化のあとには、冷戦という超大国対立によって影が薄かったとされる。)

しかし、サブシステムという概念では広範すぎて、地域がどのように定義されるかを示唆しないと指摘する。ブザンは、地域サブシステムのこれまでの研究レビューを引用して、いかなる一貫した理論的 (あるいは叙述的でさえも) 枠組みの発展への展開が欠如していることを記す。

そして、ブザン自身のものも含む近年の研究が、「安全保障関係における地域」に注目することで、範囲限定的で、より操作しやすいアプローチを展開し、これまでの (前述のような) 困難さを回避していることを指摘する。(189頁)

さらに、地域安全保障の定義には、power 関係以外に、友好 (amity) と敵意 (enmity) のパターンが中心的な要素として考慮されなければならないという議論を展開する。これは、相関性という切り口と並んで、ブザンの考察の重要概念である。友好とは、純粋な友愛から保護や支援の期待までも含まれる。また、敵意は、疑念や恐怖による関係性である。

勢力均衡論からは、このパターンが、力の分布に関連する勢力均衡の産物であるという議論ができるかもしれないが、ここで主張されるのは、友好と敵意の歴史的ダイナミクスは勢力均衡とは部分的な関係しかないということである。(そして、それが関係した場合、力の分布のような比較的流動性の高いものよりも粘着的になるという。たとえば、日本と韓国のように歴史的性質を持つ場合、敵意が特に持続的になりうるという指摘をしている。)

このような友好、敵意の局面を考察に入れることで、力の分布的観点からのおおざっぱな抽出によるものよりも、相関性のパターンや insecurity の性質についてより明確な把握が可能となるという。したがって、地域安全保障サブシステムは、ある特定の地理的空間に実質的に囲い込まれた友好と敵意のパターンのなかに表出されるというのがブザンの議論である。(190 頁)

ここにおいて、そのような構造を、彼は security complex と命名する。同章の注 9 で彼が記しているように、これはブザンのオリジナルの概念である。

さて、ここでブザンは、次のような定義を与える。

A security complex is defined as a group of states whose primary security concerns link together sufficiently closely that their national securities cannot realistically be considered apart from one another.

さらに彼は、この名称が、security という対象問題の属性、また、近接他集団から区別される緊密な相互依存関係の双方を指し示していることを注記する。そして、security complex は、共有利益と競争という、いわばポジティブ、ネガティブの双方における相互依存に着目することを指摘する。

そして、分析ツールとして考えれば、これは地域という分析レベルを明確なものとし、地域安全保障のダイナミクスの自律性を浮き立たせ、特定の地域形成への認識を容易にさせるもので、さらには異なった地域の比較安全保障研究の概念と枠組みを提供するものであると述べる。

一方で、サブシステムのような恣意的な抽象化が可能な概念とは異なって、security complex は歴史的、地政学的背景を持った、経験論的事象であるとも指摘する。自覚的なサブシステムの概念とは違い、security complex の現実是国家間の友好、敵意、あるいは無関心という個別的な状況のなかにあり、勢力均衡同様に、関係国が認識しているかどうかにかかわらず、存在し、機能するというのである。

続けてブザンは、各アクターは当然、自らへの特定の脅威を認識するし、もしそうでなければ、security complex 概念はまったく成立しないともいう。しかし、全体像を完全に認識するとは限らない。自国への脅威は認識できても、自国が他国へ与えている脅威をどの程度認識できるかという点である。security complex では、認識は存在の必要条件ではない

が、もし認識があれば、関係諸国が特定の政策問題の基調となるようなより広範な関係性の文脈に気付くことで、政策に影響を与えることも十分にありうるという。

ここで問題となるのは、認識よりも特定の友好・敵意の関係が支配的なことによって、security complex を識別するプロセスが複雑化することであるということも指摘している。個々の安全保障上の懸念がどのようなものであるかは、その国の外交政策や軍事行動を観察すれば容易に確認できる。しかし、それらの複数の懸念が全体としてどのようなパターンであるか、また、そのパターンの中で、security complex を構成するほど強力なものはなにか、という点は議論となるかもしれないという。

またブザンは次のような指摘もしている。security complex の認識には、異なった国々における安全保障上の相互依存の相対的な強さを判断する必要がある。インド・パキスタンのように非常に強い場合や、インドネシア・オーストラリア間のように比較的弱いケースもある。また、相互依存関係がポジティブな場合も、ネガティブな場合もある。通常は地域的な関係から生じるが、非常に強大な国家が関係してくる場合、域内全ての国家がその共通脅威によって結び付けられるかもしれない、といったことである。(192 頁)

また、security complex を隔てる境界線は、安全保障認識への相対的な無関心さと、戦争などの相互作用によっても明確になるという。

さらに、ブザンが絶縁体的位置（の国家）とよぶ説明も興味深い。南アジアと東南アジア間のビルマ、ヨーロッパと中東の間にあるトルコ、中東とブラックアフリカをわける、モーリタニアからスーダンにいたるサハラ一帯の諸国家などである。これらは、近接する security complex 同士を遮断（絶縁）する役割を果たしているという。(196 頁)

また、文化的、人種的結合が security complex の区別に関係するののかという点についても触れているが、ここでは「重要な要素であるが、二義的である」という結論を紹介するにとどめよう。(197 頁)

このような検討をした上で、ブザンは、security complex 間を隔てる境界線について、結局は経験的な問題であるという。security complex はアナーキー構造から生じるものであるため、原則的には、国際システム全体どこにでも存在するはずである。しかし、それを認識することが困難な2つの状況について記述している。第一は、諸国家がその国境を越えて展開するだけの力を持たないほど弱体である場合、彼らの間には security complex をうむほどの安全保障上の相互作用が存在しない。これはアフリカの一部や太平洋諸島にあてはまる。第二は、域外大国の直接的なプレゼンスが、諸国家間の安全保障ダイナミクスの通常の活動を圧倒する場合である。これは、欧州植民地時代の第三世界、あるいは第二次大戦後の超大国の競合関係がヨーロッパに大きな影響を持っていた事例などがあてはまるという。

さらに、security complex の存在が明白であっても、その境界線を見つけることが難しいケースを3つ挙げている。第一に、地域安全保障ダイナミクスの変動で境界線が揺らいでいるという単純な場合。第二に、中国に対する、インドとベトナムのそれぞれの関係に見られるように、システムレベルの高次の security complex と、特定地域に根ざす低次のものとの相互関係としてみたほうがいい場合である。第三は、中東のケースなど、諸国家間に2つ以上の安全保障相互依存の結節点があるのだが、それを単一の security complex としても考えられるケースである。

ここでブザンは次のようにまとめる。

以上のような諸論点は、現実世界の本質的な曖昧さを反映したものであり、安全保障研究にとって重要なことは、世界レベルと国家レベルの間に、地域安全保障ダイナミクスがあるという、「いくらかの」一貫した認識を持つことである。そのような認識をまったく持たないことのほうが重大な分析的誤りであろうと考える、という。つまり、その内容が論争的であろうとも、認識がないよりはずっとましであるということであり、ブザンが、いくつかの論点のさらなる検討の必要性を認めながら、しかし、地域レベルでの分析の現状に強い危機感を持って同章の議論と、security complex 概念を展開していることが読み取れる。

さて、最後に、彼は、security complex 定義における、経済要因について触れている。通常、security complex は、安全保障の軍事、政治、社会的側面に着目している。それは、経済的關係は、政治、軍事ほどは、地理的近接性に条件付けられないからである。つまり、経済安全保障の問題は、軍事、政治安全保障とはかなり異なった関係性のダイナミズムを持っている可能性が高い。したがって、security complex 分析に経済要因を検討する必要があるが、この枠組みは経済安全保障そのものを分析するのには適していないとも指摘している。(202頁)

同章は、この後、地域安全保障の歴史を概観したあと、「構造としての security complex」という節が展開される。ここでは、国際システムの構造的な理解と同様に security complex も独自の構造を持つといえるが、アナーキー構造の永続性と比較して、それは持続的といふべきものであるから、地域安全保障のパターンの変化を認識し、判断するのに有用なベンチマークを提供してくれるという。(209頁)この点の詳細、および章の最後にある security complex の政策評価の観点からの議論はここでは割愛する。

さて、以上見てきたように、RSC 概念は、同書ではほとんど、security complex として記されている。ブザンは同書において、地理的近接性の重要性を前提に議論を展開しつつも、安全保障の相互依存関係という、いわば機能的な関係を security complex の核心としており、

その意味では、地域の地理的性質と、機能的性質についてはそれほど意識的でないように思える。この点を念頭に置きつつ、その後の議論の展開を概観してみよう。

第2節 『Regional Orders』による批判的考察

1997年に公刊された『Regional Orders: Building Security in a New World』は、RSC概念を批判的に発展させた重要な業績である²。なかでもRSC概念が扱われているのは、おもに、第1章 'The New Regionalism in Security affairs' と第2章 'Regional Security Complexes and Regional Orders' および第3章 'Regional Security Complexes: A Systemic Approach' であるが、RSC概念そのものが検討されているのは、1, 2章である。ここでは、1章において、RSC概念を「現在の国際政治に適合させるため」修正するとして、以下のように定義する。（12頁）

A set of states continually affected by one or more security externalities that emanate from a distinct geographic area.

そして、地理性は、RSCのほとんどのメンバーを結びつけるものだが、地理的近接性はそのメンバーとなるための必要条件とはいえないとするのである。物理的にはその地域に位置しない大国がRSCに重要な役割を果たす例として、ヨーロッパや中東におけるアメリカの存在を挙げている。つまり、地理とは、安全保障上の外部効果（影響）が発生する物理的空間を定めるのであって、そのRSCのメンバーである諸国を定義するものではないというのが同書の見解である。

さらに、RSCは、地域秩序とは区別されると主張する。諸国家を結びつける安全保障上の外部効果は、それ自身では、国家がそれぞれの安全保障関係をマネージする方法を定義づけないという。したがって、国家がなぜ、いかにしてある特定のアプローチを志向したか、それらが維持あるいは除去される可能性に影響を与える要素は何か、という分析がなされるべきだとする。つまり、RSCと地域秩序の双方が、地域関係の研究に有用な分析概念であるとされ、この考えに基づいて、同書は展開される。（12-13頁）

ブザンの定義に対する批判の中心は、「域外大国」の扱いである。もし、その関与が「その大国の外交政策の、またその安全保障認識の中心にあり」かつ「RSCのダイナミクスの中心にある」ならば、それはもはや「域外（outside）」とはいえないというのである。

では、地理的近接性はどう考えればよいのか。ほとんどの場合、軍事力は距離によって確実に弱められるため、また、紛争の原因、相対的地位や影響力を巡る競合も地理的な近隣関係のなかで展開されることがほとんどであるから、地理性は重要であるという。

² David A. Lake and Patrick M. Morgan, *Regional Orders: Building Security in a New World*, The Pennsylvania State University Press, 1997.

しかし、RSC のメンバーが、地理的近接性に限定されることには異議を唱える。つまり、「域外」大国が、地域に持続的に大きな軍事力を展開し、重要な地域同盟の一員であり、地域の重要な紛争、安全保障交渉に参加し、あるいは大きな戦争の当事者、またはあるメンバーにとって最大の軍事脅威であるような場合、そうはいえないというのである。安全保障、紛争に関しては「"outside" state is inside」であるという印象的な表現を用いている。
(30 頁)

つまり、RSC は地理的空間を持つが、メンバーに関しては必ずしもそうではない、ということだという。これによって、たとえば、東アジア RSC においてアメリカがメンバーとされることは重要なポイントであろう。

さらに、この結果、グレー空間が生まれる。RSC はオーバーラップし、あるいは、イシュー、事象、認識などによって、変化するということである。

同書は、この後、地域秩序の分析を基調に、各地域の分析などを展開しているがここでは割愛する。

第3節 『Security: A New Framework for Analysis』にみる新たな展開

さて、1998 年には、ブザンと二名の共著による『Security: A New Framework for Analysis』が上梓された³。ここでは、冷戦後国際システムが脱中心化し、地域化したことをふまえ、『People, States and Fear』などをアップデートし、脱冷戦後のより広範な安全保障課題に security complex 理論を適応させ、新しい国際秩序を分析することを可能にすることが目的とされている。(vii)つまり、包括的な安全保障の新たな分析枠組みの提示が核心となる。

そこで、伝統的な軍事、政治セクターだけでなく、経済、社会、環境セクターの諸安全保障課題にどうなじむのかという視角が提起される。また、『People, States and Fear』での矛盾すなわち、安全保障の広い定義と、security complex 理論がおもに軍事政治的観点に注目していたことをどう説明するかという点も問題意識として提示されている。

同書の特徴は、安全保障課題の社会的側面への着目や、あるいは、Securitization 概念の提起によって注目されているウィーバー（Waever）が加わったことによって、security complex 理論の射程が格段に広がったことである。また、security complex 理論という用語からも推測できるように、単なる RSC 概念の提起にとどまらず、国際安全保障を説明する包括的な理論に展開する意気込みを持つものである。

ブザンの前書による伝統的 security complex 理論は、安全保障関係の永続的な地域パターンの形成と、それら地域への域外介入のパターンを十分説明力があつたとしたうえで、し

³ Barry Buzan, Ole Waever and Jaap de Wilde, *Security: A New Framework for Analysis*, Lynne Rienner Publishers, 1998.

かし、この理論が、冷戦後、政治軍事安全保障の重要性が低下する中で同様の説明力を持つのかという問題提起がなされている。

さらに、同書の構成が、3章「軍事セクター」、4章「環境セクター」、5章「経済セクター」、6章「社会セクター」、7章「政治セクター」とされているように、安全保障を5つのセクターから検討することもここでの主眼となっている。

このセクターについては、相互関係のいくつかの特徴的なパターンを抜き出すことで、分析のために全体を分割することに意味があり、それぞれが独立して存在するというわけではないとされる。つまり、複合的な全体から分離できない部分であり、セクターの選択は、分析のために、複雑さを軽減させることにのみ目的があるという。それぞれは、現実の一側面に着目しているので、最終的には融合させることが重要とされ、その作業は、8章「どのようにセクターが統合されるか」で試みられる。ここでは、第1章「序論」を中心にみていこう。

まず、序論では、安全保障研究における、狭義と広義の定義を巡る問題、分析レベルの問題、およびセクターが検討された後、地域が以下のように議論されている。(9頁)

冷戦後、二極化が解体し、それぞれの地域がその問題の当事者になってきた。分析レベルの問題で言えば、地域は特別なタイプのサブシステムである。なぜ国家やほかのユニットは、地域的クラスターを形成するのか。(たとえば、EU, NAFTA, ASEAN, SARC, OAU など。)

地域は、それだけで分析の対象であって、説明の結果やリソースをそこにみつけることができるような特別なものである。なぜこのタイプの領域的サブシステムが形成され、国際システムの一面として維持されるのか。

これについて、Hans Mouritzen の議論を用いて、国家は、移動不能で固定的である。(移動する部族集団を想起せよ。)このような移動不能なユニットの意味を無視してきたことが、国際関係理論がサブシステムを省みなかったことを部分的に説明するという。

これは政治軍事セクターに着目しているが、たとえば、経済セクターでは、企業などは移動可能である。そこではシステムレベルの論理がより強く働いており、地域形成が期待できないとも指摘している。(10頁)

次に、「伝統的」security complex 理論が次のように検討される。同理論は『People, States and Fear』において初めて提起されたあと、多くの適応事例がみられている。安全保障地域の論理は、国際安全保障が、相関性の問題であるという事実から生じる。ほとんどの政治、軍事的脅威は、距離が短いほど影響があり、insecurity は、近接性としばしば関係する。ほとんどの国家は、遠くの国よりも、近隣諸国を恐れる。

security complex は、国家間安全保障関係の相対的な強度についてであり、それは、パワー分布と友敵の歴史的関係双方によって形作られる特徴的な地域パターンにつながる。

security complex は以下のように定義される。(12 頁)

A set of states whose major security perceptions and concerns are so interlinked that their national security problems cannot reasonably be analyzed or resolved apart from one another.

さらに、地理的に異質性をもち、アナーキーな国際システムにおいて、security complex は通常の、予期される特徴であって、もしそれが存在しないなら疑問が生じるという。security complex は、その構成員の關係に中心的役割を果たすだけでなく、強大な域外国がその地域をいかに浸透するかについても重要な意味を持つとされる。また、security complex の内的なダイナミズムは、友好・敵意によって左右される安全保障相互依存の度合いによって決定されるとして、ネガティブ極の紛争、中央に安全保障レジーム、ポジティブ極に多元的安全保障コミュニティを提示している。

また、security complex の本質的構造の3つの鍵となる要素は以下のとおりである。

- 1) ユニットの配置と各ユニットの相違
- 2) 友好、提起のパターン
- 3) 主要ユニット間のパワーの分布

そして、これらの要素の重大な変化は、security complex の再定義を要求するとされる。このようなアプローチによって、地域安全保障を、静的にも、動的にも分析可能となると指摘している。security complex が構造と捉えられるなら、構造的影響と、構造的変化のプロセス双方による結果を探ることができる。重要なことは、そのような変化が、本質的構造を維持するか、なんらかの変質に向かわせるかということであるという。

そこで、security complex における変化の影響を評価するために、4つの構造的オプションが提示されている。

- 1) 現状維持
- 2) 内的変化
- 3) 外的変化
- 4) オーバーレイ

そして、地域レベルが確立されると、安全保障の包括的な分析枠組みを構成する各層を描き出すことができるとして、以下の各層を指摘する。

- ・底辺には、個々の国家、社会の国内的安全保障環境
- ・次に R S C
- ・security complex の間の關係
- ・最上階には、システムレベルを構築する大国關係

また、ある意味で、security complex は分析者が「現実」に押し付ける理論的構築物であるが、しかし、その理論の内部において、世界政治の観察可能なパターンを反映するもので、たんにランダムに構築されるものではないという。構成国を他の近隣諸国から区別する、安全保障相互依存の明白な領土のパターンが存在しなければならないのであって、したがって、ヨーロッパ security complex はあるが北欧にはなく、中東にはあるが、地中海はないという指摘がある。

security complex の意義は、国家安全保障、グローバル安全保障の極端をさけ、そのふたつが交差し、ほとんどの行動がおこなわれる、地域に焦点を合わせることにあるとされる。また、security complex 理論は、国家内部から世界レベルまで、研究をリンクさせるという。

これによって、安定と変化のシナリオと研究をうみだし、行動と組織化の適切な領域を明確にして、国家の現状の幅を示すことで、政策目的の思考の枠組みとしても作用するとされる。

次に、「伝統的 security complex 理論を超えて」と題した節では以下のような議論が展開されている。

伝統的 security complex 理論は政治、軍事セクターの考察のために形成されたため、国家が対象となっている。そして安全保障地域は、次のような特質を持つ。

- 1) 2 つ以上の国家を含む
- 2) それらの国家は地理的に一貫したグルーピング
- 3) 国家間の関係は（ポジティブでもネガティブでも）安全保障の強い相互依存関係によって域外と区別される
- 4) 安全保障の相互依存関係は、深く、持続的であるが、永続的なものではない

換言すれば、安全保障地域は、政治サブシステムの 1 タイプであり、それが埋め込まれているより広い国際政治システムの比較的自立的な小型バージョンであった。分析単位が国家であったため、安全保障地域はかなり大規模であり、security complex はサブ大陸、大陸サイズであった。（南アジア、中東、南部アフリカ、南アメリカなど。）

伝統的 security complex 理論を越える一つの方法として、ここでは、より広い範囲のセクターを分析対象とする。アクターとしての国家、セクターとして政治軍事に固執しなければ、地域パターンはどの程度まで識別可能であろうか。

そして、security complex を政治軍事以外に、アクターを国家以外に開放する方法として次の 2 つが提起される。

- 1) 同質的 complex
- 2) 異質 complex

そして、同質的 complex、セクター特定のアプローチを3 - 7章で展開していくが、これは同質的アプローチが異質的アプローチに優位であることを意味しない。(8章参照。)

このアプローチの問題は、異なったセクターにおいて、ユニットと地域の意味が非常に異なる場合があることである。したがって、地域を、どのセクターにおいても、政治的、国家定義的な用法を標準とすることで、一貫性を保つという。(18頁)

したがって、地域とは、2つ以上の国家からなる空間的に一貫した領域を意味する。

伝統的 security complex 理論を超える2つめの方法は、諸問題がセキュリティー化されるプロセスを理解するときに明示的に社会構成的アプローチをとることが指摘される。

これは、友好、敵意のパターンのみを問題にしていた伝統的 security complex 理論からの明らかな飛躍である。

この後、第2章では、力の行使だけでなく、間主観的政治の特定のタイプとして安全保障を理解することが試みられる。そして、3章から7章では、それぞれのセクターでなにが安全保障課題か、どのようなアクターが中心的か、脅威と脆弱性はどのような論理によるか、ローカル、地域、グローバル規模の間で、安全保障ダイナミクスがどのように異なるかなどが論じられている。とくに、軍事セクターでは、脱セキュリタライゼーションが、諸国家間の軍事的安全保障ジレンマを解消したこと、経済の脱セキュリタライゼーションは、資本主義イデオロギーの中心(209頁)であることなどの指摘はいずれも興味深い。

このように同書では、ブザンの『People, States and Fear』による議論を、伝統的 security complex 理論として整理したうえで、主にウィーバーの知的貢献によって、政治軍事セクターと国家中心のアプローチからの焦点領域の拡大および、セキュリティー化過程への新たな理論的切込みを行うことで、RSC 概念を、国際安全保障問題に広く位置づけることに成功したといえるだろう。

第4節 むすびにかえて - 『Regions and Powers』および若干の分析

2003年にブザンとウィーバーによって著された『Regions and Powers: The Structure of International Security』は、このような流れの中で、とくに安全保障アジェンダの拡大と securitisation アプローチという点で画期的であった『Security: A New Framework for Analysis』の続編とも言うべき大著である⁴。本文488頁中、アジア、アメリカ、ヨーロッパという事例研究が、93-439頁と大部分を占める。

しかし、第一部の「序論：グローバル安全保障への地域アプローチの発展」と題された

⁴ Barry Buzan and Ole Waever, *Regions and Powers: The Structure of International Security*, Cambridge University Press, 2003.

3章だけでも、80 頁近い包括的な議論が展開されている。その基調は、国際政治の中で、安全保障の地域レベルがより自律的、より顕著になってきたというこれまでの路線を踏襲している。なかでも題名にあるとおり、地域と大国（関係）のきりむすびが一つの大きな論点となっている。

さらに、ここにおいて、regional security complex theory(RSCT)という用語が一貫して用いられるようになったことも、RSC 概念の展開において注目される。RSCT は、物質主義とコンストラクティビストのアプローチのブレンドを用いることが明示される。(4 頁)そして、地域研究において、RSCT が地域安全保障における唯一の存在する理論であろうという確固たる自己評価が示されている。(83 頁)

本書は、事例検討のあと、14 章において、各地域安全保障の多様性が RSCT によっていかに捉えられるかという論点を提示し、15 章では、領域性と地域レベルという2つの前提条件に検討を加え、グローバリゼーション、国際テロリズムなどがどのように説明されるかを論じている。

内容について議論はあるものの豊富な地域研究事例も備え、『People, States and Fear』によって始まった RSC 概念の展開は、質的にも量的にも、相当の蓄積をもたらして一定のレベルに達したといえよう。地域の比較検討を可能にするという当初の目的にも沿った展開であると考えられる。

以下、RSCT の展望について簡単に考察する。

まず、地域概念についてである。たとえば、フィジカルな（地形、戦略的）地域とファンクショナルな（経済、環境、文化）地域の差異の拡大を論じる論考もあるが、RSC 概念をめぐる議論でもこれまでさまざまな視角が提示されてきた⁵。いわゆる「域外大国」についての分析、および安全保障のネットワーク化といった論点を考えるとき、RSC 概念の「地域」がなにを意味するものかについての議論が深められる必要がある。

第二に、国際関係理論における RSCT の位置づけである。当初、ブザンによっていわばネオリアリズム的な議論として始まったが、本稿で見たように、それは、安全保障セクターの多様化と、Securitization に象徴されるコンストラクティビスト的検討を包含して展開してきた。とくに、どのように諸問題が（脱）安全保障化されるかという視角は、安全保障研究にとって興味深いものである。また、システムレベルの分析を核とするネオリアリズムに対して、いわばサブシステムの重要性を強調する RSCT がどのような対話を展開できるのかという重大な問題については、必ずしも十分な研究が行われていないようである。

最後に、そして何よりも重要な論点と思われるのは、冒頭にも述べたように、これほどの可能性と理論的、事例的蓄積を持った RSCT について、これまであまりにも研究者の反

⁵ Raimo Vayrynen, "Regionalism: Old and New," *International Studies Review* (2003)5

応が限定的であったことについてである。本稿では、地域研究者を中心にいくつか展開されている諸議論についてはカバーできなかったが、たとえば日本に限っても、RSCT を正面から取り上げた論考はほとんど存在しない。RSCT については、その欠陥などが大きな議論になったこともなく、したがって検討のうでで用いられなくなったのではなく、(よって冒頭の「無視」は不正確で)単純に「話題になっていない」というべきであろう。

これは、アメリカ発の国際関係理論の影響があまりに圧倒的な日本の事情が影響しているのかもしれないが、現代国際関係に特殊な位置を占めるアメリカでの受け取り方はともかく、地域と安全保障が重要な課題となる日本にとっては、政策的インプリケーションの観点からも大きな損失ではないか。とくに東アジア地域をめぐる論点の定まらない諸議論だけが百出している現状にとっては、大きな助けとなるはずである。まして学術的観点からは、地域研究者にとっても、理論分野の専門家にとっても、このような諸論点が最低限の知識として共有されなければ、現在の国際関係論の重要部分を見誤ることになるだろう。

したがって、本プロジェクトにおいても、事例研究の積み上げにとどまらない方向性を目指す作業のなかで、RSCT を重要な突破点として、地域レベルの分析について前例や流行(の欠如?)にとらわれない取り組みを真剣に行うべきであろう。

[参考文献]

< 外国語文献 >

Buzan, Barry, *People, States and Fear: An Agenda for International Security Studies in the Post-Cold War Era*, Wheatsheaf, 1991

Buzan, Barry, Ole Waever and Jaap de Wilde, *Security: A New Framework for Analysis*, Lynne Rienner Publishers, 1998.

Buzan, Barry and Ole Waever, *Regions and Powers: The Structure of International Security*, Cambridge University Press, 2003.

Lake, David A. and Patrick M. Morgan, *Regional Orders: Building Security in a New World*, The Pennsylvania State University Press, 1997.

Vayrynen, Raimo, "Regionalism: Old and New," *International Studies Review* (2003)5